



# シングルマザー

S i n g l e   M o t h e r      別れと出逢い

Kusumi Yasumasa

久住 泰正

青山ライフ出版

装幀 / イラスト 溝上なおこ

■ 目次

シングルマザー

—別れと出逢い

.....

5

都会の片隅で.....

149



# シングルマザー

—別れと出逢い

山々に囲まれた遠野の夏は氣怠い。山林の静寂さは、蟬の鳴き声によつてかき乱されていた。アパートの一室では、生まれてまだ八ヶ月の娘と二歳の男の子が昼寝をしていた。その傍で扇風機の回る音が微かに音を立てていた。うつむいていた藍子が顔を上げて健史を見た。

「あねこ（女）ができだのが」

藍子は疑いのまなざしで言つた。

「そんなんじやねえけど……」

健史は、力のない返事をした。

「じや、なんで離婚せねばならんの」

藍子は、健史の急な言葉に戸惑いを感じていた。

「おら、童つ子（子供）育てられねえ」

「誰だつて、自信ねえ。だから夫婦できばる（頑張る）んだべな」

藍子は強い口調で言つた。

健史は俯いたままだった。その姿は、結婚当時の強い健史ではなかつた。背を丸くしてうつむく健史に、

藍子は憐れにも似た感情になつた。

「ほがに本当の理由があるだべ」

健史は女を否定しているが、本当は女が出来たのだろうと藍子は思っていた。この五年間共に生活してきて、健史の性格や考えが分かつてきただ。

「童つ子ができるだ

「えつ！」

「童つ子ができるだ」

健史は小さな声で繰り返して言つた。

「童つ子つて、ほがのあねこの？」

藍子は我が耳を疑つた。

健史は何も言わずに頷いた。

藍子は、天を仰いだ。しばらくして涙が溢れてきた。

「なしで、なしで」

それ以上言葉にならなかつた。

「童つ子を下ろせとへる（云う）ごどもきがねえで、生むとへるんだ」

健史は、弁解がましく言つた。

「童つ子を殺すのが」

藍子は、胸が張り裂けそうになつた。自分も生みの苦しみを二回も経験して命を授かつた。簡単に堕ろせ

ばいいと言つた健史の言葉が悪魔の囁きのように聞こえてきた。

「んだば一生面倒みろとへわれ（云われた）たべ」

健史はまた弁明した。

「浮気をすんれば、こうなることぐらい分からなかつたのが」

藍子は、健史を見つめた。

「遊びのつもりだつたがあ」

健史は、後悔しているように言つた。

しかし、健史は取り返しのつかない事をし、どうしようもない所まで追い込まれていた。

「少し頭っこを冷やすといいべ」

藍子はいくらか心の動搖が収まつたのか冷静に言つた。

健史と藍子は結婚して三年、いや、同棲して五年と言つた方がいいだろう。地元の高校を卒業してまもなく同棲を始めた。

高校の頃の健史はかつこよかつた。陸上部で短距離ランナーとして活躍していた。県大会にも出場し女子生徒から憧れの的だつた。

高校三年の時、藍子と同じ組になつた。放課後、陸上部にいる健史の所に藍子が行つた。帰り道が一緒の方向という事もあるが、藍子の憧れの人でもあつた。

陸上部の部室まで行つた時、ちょうど健史が出てきた。

「よおー」

健史は右手を少し上げて挨拶した。

## シングルマザー

藍子は「うん」というように顔を少し動かした。

「あのー、これから帰るんだべ」

藍子は小さな声で言つた。胸は張り裂けそうに音を立てているのが聞こえてくる。

「ああ、一緒に帰つか」

健史はすがすがしい目をして言つた。

藍子にとつて初めてのデートが二人で帰るあぜ道だつた。

あの時の胸の痛みは、今でも覚えている。おそらく一度とはないだろう青春の思い出だつた。

二人の仲は、クラスでも噂になるほどになつた。それでも藍子は嬉しかつた。健史といふときが一番幸せだつた。

卒業が近づくに連れて、藍子は健史との結婚を意識し始めていた。

しかし、親は猛反対だつた。健史の両親も同じだつた。

理由は簡単だつた。まだ若すぎるという理由だ。

藍子にはその意味が分からなかつた。好きな人がいれば結婚するのが当たり前だと思っていた。健史と二人で働けば何とか生活はできると信じていた。

卒業の日、二人はそのまま家に帰らなかつた。これは一人で決めていた事だつた。親に反対され結婚できないなら死んだ方がましだと思った。二人は、これ以上離れて暮らすことに耐えられないでいた。卒業は良い機会になつた。この日に、二人のかけ落ちが始まつた。

「後悔しないべか」

健史は、ホテルのベッドに横たわる藍子を見つめて言つた。

「うん」

藍子は小さく頷いた。健史の唇が藍子の顔に静かに覆いかぶさつてくる。藍子は目を閉じた。生温かい健史の唇が藍子の唇と重なりあつた。

声にならないため息が藍子から漏れた。

藍子が始めて知る男の匂いと身体だつた。

それから二年間は、親の承諾もない中、同棲生活を始めた。

藍子にとつて初めて暮らす男との生活だつた。健史は町工場で働いた。藍子はアルバイトで店員をやつていた。二人で働いて何とか暮らしていく。楽しいひと時だつた。親が若いと結婚を反対した理由が分からなかつた。自分達が正しいと思つていた。この二年間は親とも連絡を取つていなかつたが、小さなこの町では、元氣でいる噂は聞こえていた。

二十歳になつて自分の意思で結婚出来るようになり、藍子の誕生日に役場へ婚姻届を出した。

その時は、お腹に新しい命が宿つていた。

藍子は、お腹で動く小さな鼓動に女としての喜びを感じていた。妊娠した藍子を気遣い健史はとても優しかつた。

藍子は幸せをかみしめていた。やがて、男の子が生まれた。

男の子の名前は「篤史」と名付けた。

平凡な田舎暮らしだが藍子は幸せだつた。この町に生まれ、育ち結婚してこの町に暮す。それは藍子にとつ